



TITLE:

<Book Review>Ronald Provencher. Two Malay Worlds : Interaction in Urban and Rural Settings. Berkeley : Center for South and Southeast Asia Studies, University of California, 1971, xii+211p.

AUTHOR(S):

坪内, 良博

---

CITATION:

坪内, 良博. <Book Review>Ronald Provencher. Two Malay Worlds : Interaction in Urban and Rural Settings. Berkeley : Center for South and Southeast Asia Studies, University of California, 1971, xii+211p.. 東南アジア研究 1972, 10(1): 171-172

ISSUE DATE:

1972-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/55686>

RIGHT:

的变化を鮮かに描写している。しかも、著者は人類学のみならず、農業経済学、地理学、社会学にも造詣が深く、この歴史的变化の過程を「部族民社会」から「農民社会」への同化の過程、もしくは「山地民」の「平地民化」(plain emulation)の過程として分析している。この場合、既存の理論を当てはめて事実を解釈したり、組織づけたりするよりも、むしろ著者自身の経験的事実のなかから比較可能な理論的枠組を構築しようと努力しており、そういう意味で、実証的性格に富むとともに、きわめて野心的な書でもある。こうした専門的分析の後に得られた底辺の理解を通じて、少数民族の諸問題が具体的に考察される。本書の作成にあたっては、著者自身によるヒマラヤ山地民の調査と分析の経験と実績が大いに役立っているものと推察される。

以下、要約を試みるならば、第1章で山地民カレン族の概観を記した後、第2章～第5章において、平地民化の過程が分析される。すなわち、カレン族の村落構造は焼畑耕作に支えられる、移動的、血縁的なロング・ハウスに原型が求められるが、水田耕作が導入され、他方、焼畑禁止令によって七圃農業への転換が余儀なくされることによって、定着的、地縁的な村落が形成される。水田耕作は土地所有の觀念に変化を与え、総有制から個人所有に移行し、かつての血縁的な共同組織としての村は崩壊はじめる。貨幣経済の浸透や現金収入としての水牛飼育はこうした傾向に拍車をかける。そして個人主義化と親族組織の弱体化が進行するとともに、宗教面では世俗化が起り、母系的な社会集団に関連する Oxe の儀礼は組織と信仰の両面において簡略化されたり、chakasi 運動によって廃止されたりして、カレン族固有の宗教は弱められるが、これらの現象は仏教の普及と深い関連をもつことが明らかにされる。しかし、他方、復帰運動的な現象も同時に見出され、たとえば、talutaphadu 儀礼が一例として挙げられるが、これは村神的な性格が強く、カレン族の村落社会が地縁集団として再編成される段階に出現するものである。こうした変容過程を分析するにあたっては、山地カレンと平地カレンがたえず比較され、国民形成ないしタイ人社会への同化として把握されているところに特異性がある。第6章と第7章では、政府による教育、宗教、言語の普及活動に対するカ

レン族の反応が分析されており、山地民対策に対する批判と提言が随所に見出される。最後に結語として、平地民化に関して理論的考察が試みられている。変動過程の分析に際しては、客観的条件のみでは不十分であり、主体的条件の重要性を力説しているあたり、しごくもっともとはいえ、いざ分析となれば見落とされやすいものである。なお、付録として末尾に付け加えられている「カレン族小史」と「焼畑農業」も、この種の研究者に貴重な資料を提供している。

本書は含蓄の深いモノグラフであるので、簡単な要約はかえって内容を無味乾燥なものにしてしまう。なによりも一読をお勧めする次第である。

山地民といえば、一国の経済発展からほど遠い問題であるかのように考えられがちであるが、すでに触れたごとく、政府が現に悩んでいる問題であることには間違いない。この機会に、著者と共に、発展途上国の少数民族の問題に目を向けることが望まれる。

(水野浩一・東南ア研)

Ronald Provencher. *Two Malay Worlds: Interaction in Urban and Rural Settings*. Berkeley: Center for South and Southeast Asia Studies, University of California, 1971. xii+211 pp.

本書はカリフォルニア大学南・東南アジア研究センターの Research Monograph No. 4 として、仮綴の体裁で出版されている。著者のねらいは、同じ伝統文化をもちながら、都市の集落と農村の集落とで社会環境がいかに異なり、またこの異なった社会環境が人々の社会的行為にいかなる差異を生ぜしめているかを、西海岸のマレー人社会に関して明らかにすることである。

この報告の基礎となった現地調査は、1964年9月から1965年12月にかけて行なわれた。調査地は、都市的な集落としてクアラルンプール市内の Kam-

pong Bahru とよばれるマレー人居住地区の一區画が、農村的な集落としてクアラルンプール近郊 Kuang における水稲およびゴムタッピングを生業とする農村が選ばれている。

本書の構成は、序論および九つの章において、これら二つの調査地の様態を交互に叙述することにより成り立っている。序論では方法論、第1章では調査地の概況、第2章では土地所有・借地・小作、第3章では職業・生業、第4章では世帯・階層・出身地など各種の社会集合、第5章では組織とリーダーシップ、第6章では基本的な役割の習得、第7章では対人作法、第8章では役割演技・行為様式、第9章では環境と相互作用との関係が述べられる。

都市的な Kampong Bahru における二つの階層、すなわち家主と借家人、および村落的な Kuang の住民という三つのグループに着目して比較が行なわれ、都市的環境における家主層の生活内容および行為様式が、マレー的な文化との関係において、最も

精巧な洗練されたセットを構成していることが明らかにされる。

本書における叙述の多くの部分は都市的な Kampong Bahru の生活に関してさかれている。これは歴史資料の量や住民間の相互作用の量や種類が多いことに関連しているが、同時にこれまでに数少なかった都市のマレー人に関するデータを提供するという著者の意図にもよる。実際、この報告はこの最後の意味ではきわめて貴重なものといえよう。民族誌的な叙述の手法はときとして冗長に感じられるが、これを資料として扱うときには利用価値が大きいかもしれない。これに対して村落に関する叙述は簡略でやや物足りない。文化の厚みという点において、またそれを十分に発揮させる経済力という点において適当な村落が選ばれたかどうかに関しても一抹の不安が残る。ともあれ、都市のマレー人に関して新しいモノグラフが出たことは大変よろこばしいことである。

(坪内良博・東南ア研)